

博物館常設展示における入場者の観覧行動

濱口 寿夫*

Visitors' behavior at the permanent exhibition of Okinawa Prefectural Museum

Hisao HAMAGUCHI

はじめに

沖縄県立博物館・美術館の常設展示は、平成19年11月に館自体が那覇市首里から現在の那覇市おもろまちに移動したことに伴い全面的に更新された。常設展示は、総合展示とその周辺に配置された自然史、考古、美術工芸、歴史、民俗の部門展示から構成されている。総合展示では、中心の地形模型と壁ケース沿いに時代順に配列された展示項目を観覧することにより、琉球列島の形成から本土復帰後の現在に至るまで、沖縄の歴史文化が概観できるように設計されている。そこには、「総合展示で沖縄の歴史を理解してもらい、さらに入場者の興味関心に従って部門展示を見てほしい」という展示する側の意図がある。

しかし、入場者を見ていると、こちらの設定した動線とは無関係に展示項目を回ったり、概ね動線に沿っている場合でも途中で部門展示との間を行き来しているうちに動線上の展示項目の幾つかを見逃してしまう人が多いという印象である。また、入場者自身からも、「どのような順序で見たらよいか分からなかった」という意見が寄せられることがしばしばある。そこで、実際に入場者がどのように展示項目を見ているのか観察し、データをとってみることにした。我々展示をする側としてはどのように観覧されているのか実態を把握し、その結果を今後の展示改善に活かすべきだと考えるからである。

調査の場所と方法

常設展示室では、中心部分を総合展示室（面積：1,252m²）が占め、その外側を自然史、考古、美術

工芸、歴史及び民俗の5つの部門展示室（5室合計の面積；1,344m²）がとり囲むように配置されている（図1）。総合展示室と部門展示室は互いに2乃至4箇所の出入り口でつながっており、行き来が可能である。また、部門展示室のうち、自然史、考古、美術工芸の3室は考古室を真ん中に直列に並び、それぞれ1箇所の連絡口でつながっている。したがって、この3室については総合展示室を通らなくても互いに行き来することができる。歴史室及び民俗室については、総合展示室のみから出入りすることになる。

総合展示室は、4辺を囲む壁と入り口正面突き当たりの「化石が語る沖縄」（図1の1-1）以外には天井まで達する遮蔽物はなく、展示室空間内部に配置された展示物についてはある程度見渡すことができる。

総合展示は、原則的に壁ケースの展示が説明の主軸であり、展示室の4辺に沿って反時計回りに1周する動線になっている。動線の内側には、近くの壁ケースの展示内容に関する比較的大型の資料がステージ展示されている場所が多い。総合展示室の中心にある「0-1 地形模型」は動線上の位置づけは明確ではないが、沖縄の歴史文化の背景として重要な地理的環境を把握してもらうため、入場後早い段階で見てもらうことを想定している。総合展示の動線については、入り口付近3ヵ所に案内表示がある（図2）。

本調査では、入場者を常設展示室に入ってから出るまで追跡し、性別、年齢、入場・退出の時刻、展示項目の観覧順序、それぞれの展示項目で滞留した

* 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.

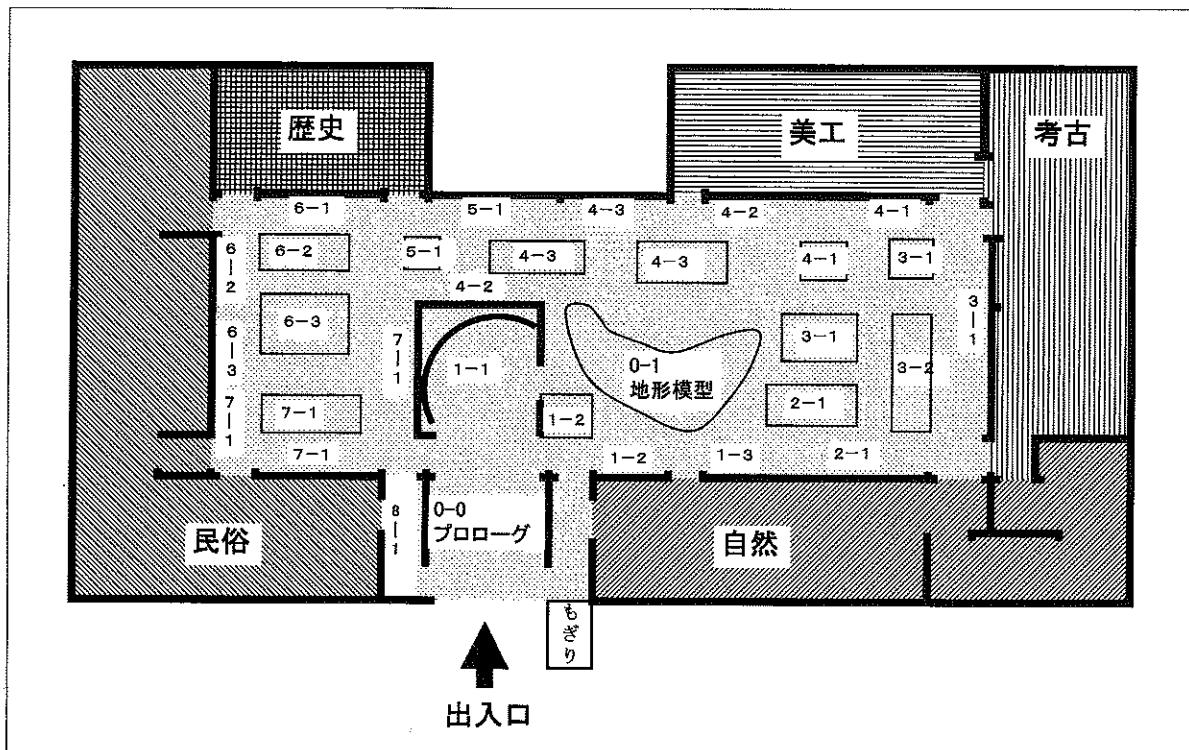


図1. 常設展示室模式図。「0-0」から「8-1」が総合展示である。「0-0」等の数字は、「大テーマ中テーマ」の番号をあらわしており、その内容については表1を参照のこと

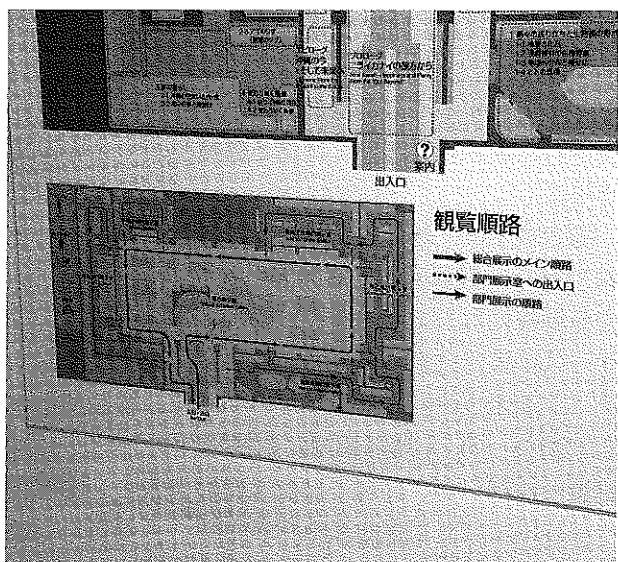


図2. 動線の案内表示

時間を記録した。なお、年齢については10才刻みの推定である。この調査において「観覧」とは、その展示項目の前で立ち止まった場合をそのように見なしており、移動をとめなかつた場合は含めていない。

データの採取は、平成21年度の学芸員実習の一環で実習生が行った。学芸員実習は前期（6月22日か

ら7月3日）、後期（8月17日から8月28日）に分かれており、それぞれ実習生の人数は14名と11名である。合計で122人の入場者にかかるデータを採取したが、すべての入場者に対し、すべての項目が記録されているわけではなく、後述する結果のデータ数は必ずしもこの人数と一致しない。

展示項目の単位は、「大テーマ」「中テーマ」「小テーマ」のうちの小テーマを基本とした。ただし、一つの小テーマに対し、資料及び解説による通常の展示とタッチパネル式のPCが併置されているところは、それらを別の項目として扱った。これはタッチパネルのみ操作する人、通常の展示のみ見る人、その両方の人を区別するためである。また、同一小テーマの展示であっても展示資料が分離して配置されているなど、それぞれ独立性が高いものも別項目としている。逆に小テーマが異なる場合でも、同一の展示ケース内にあるなど、観覧する側から見て明らかにひとかたまりの展示物と認識されると思われるものは同一の項目とした。

結 果

(1) 滞在時間

入場者が常設展示室に入場してから退出するまでの時間を「滞在時間」と呼ぶこととする。滞在時間の最長は、50代男性の160分、最短は20代女性の9分であった。平均滞在時間は 52.7 ± 30.2 分 ($n=120$ 、平均値土標準偏差、以下同じ) であり、性差は見られなかつた（男性 50.9 ± 31.3 分、 $n=65$ ；女性 54.5 ± 29.5 分、 $n=55$ 、U検定 $p=0.32$ ）。

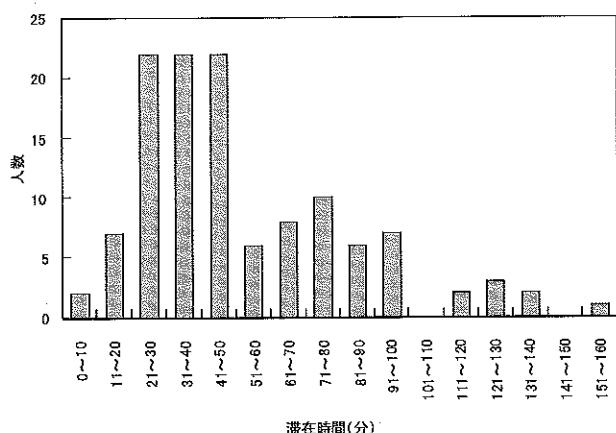


図3. 常設展示滞在時間の頻度分布

滞在時間を10分ごとに区切って頻度分布を見たのが図3である。これによると、滞在時間の最頻値は21分～50分となっている。

図4は、年齢と滞在時間の関係を示したものである。10代が最も短く、50代までは年齢があがるにつれて滞在時間の上限が大きくなっていく傾向が見られるが、60代以上では下がっている。60代以上はデータ数が少ないため統合したうえで、年齢層間の滞在

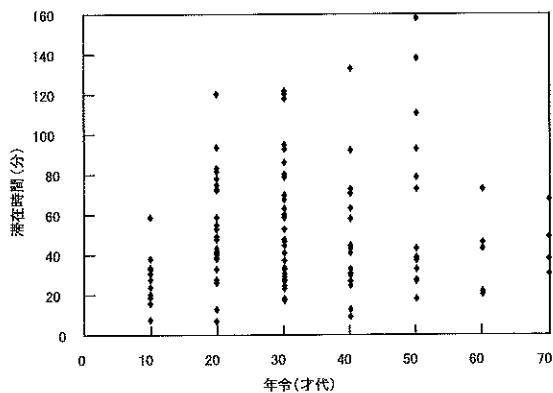


図4. 入館者の推定年齢（10才ごと）と滞在時間

時間と比較すると、これらの間には有意な差がある（Kruskal-Wallis検定 $p=0.04$ ）。

(2) 展示項目ごとの観覧者数と滞留時間

ここでは入場者が特定の展示項目の前で観覧している時間を「滞留時間」と呼んでいる。常設展示における163の展示項目について、それぞれの観覧者数と平均滞留時間を表1に示す。データは112人の入場者から採取した。

展示項目あたり平均観覧者数は 8.0 ± 8.3 人 ($n=163$) であった。1人でも見た場合の展示項目ごとの平均滞留時間は 2.45 ± 1.42 分 ($n=129$) である。逆に入場者の側から考えた場合、1入場者が1回の常設展示室滞在で観覧する項目は 11.63 ± 8.80 項目 ($n=112$) であった。

観覧者が最も多かったのは「1-1 化石が語る沖縄」（表1、通し番号4；「1-1」は「大テーマ番号－中テーマ番号」以下同様）で51人、次に「0-1 琉球列島地形模型」のタッチパネル・投影映像（表1、通し番号3）の50人、「0-0 サンゴ礁ジオラマ」（表1、通し番号1）の32人となっている。その他「1-2 古我知原貝塚の集落復元模型」（表1、通し番号5）等と併せ、合計17項目が20人を越える人たちに観覧されていた。逆に、今回の調査で、観覧者が観察できなかつたのは、「3-1 奉使琉球団のタッチパネル（表1、通し番号21）等13項目である。

総合展示の基本動線は壁沿いの周回通路であり、壁ケースの展示が主軸となっている。そこで、この動線との位置関係を、動線外側にある壁ケースの展示（段階1）、壁ケースと通路を挟んで対峙する展示（段階2）、間に別の展示項目を挟み動線と直接接していない項目（段階3）に区分して観覧者数を比較したところ、有意ではないものの基本動線・観覧方向から離れるほど観覧者数が少ないと傾向が見られた（図5）。

観覧者数と、平均観覧時間（ただし、時間0のデータは含めないで計算）の関係は図6のとおりである。特に観覧者の多い「1-1 化石が語る沖縄」と「0-1 琉球列島地形模型」のタッチパネル・投影映像の2つの点が右上に離れて存在するが、これらを除くと観覧者数が多くなると滞在時間の上限が下がってくる傾向が見られる。

表1. 展示項目ごとの観覧者数及び滞留時間

部門	大テーマ	中テーマ	通し番号	展示項目	観覧者数(人)	滞留時間(分)	n	動線の位置関係(改善)
	0、二ライカナイの彼方から	0. プロローグ	1	サンゴ礁及び海岸のジオラマ、サンゴの骨格	32	1.5 (7)	1	
	0、シマの自然とくらし	1. 沖縄の島々	2	琉球列島地形模型	11	1.0 (3)	1	
			3	琉球列島地形模型（「地形模型を見る」）；地形模型への投影映像（押しボタンによるコンテンツ選択）、映像端末「シマの自然とくらし」（タッチパネル6台）	50	7.1 (30)	1	
1、海で結ばれた人々	1. 化石が語る沖縄	4		化石、琉球石灰岩、映像（大型スクリーン；自動再生）	51	4.3 (27)	1	
	2. 先史時代のくらしと姿	5	(1)「古我知原貝塚の世界」；住居集落模型「古我知原貝塚のくらし」	21	1.6 (9)	1		
		6	(1)「古我知原貝塚の世界」；土器、石器等出土資料、食料復元模型	16	1.7 (10)	1		
	3. 島々を行き交う人とモノ	7	(1)「北との交流」、(2)「南との交流」、(3)「海をこえて」；貝輪、貝斧、貝匙等	10	1.9 (8)	1		
		8	(1)(2)(3)映像「島々を行き交う人とモノ」（タッチパネル）	5	2.7 (3)	1		
2、貝塚の暮らから琉球王国へ	1. 島々に見られるグスク	9	(1)「さまざまなグスク」、(2)「グスク遺物に見る交流」、(3)「三山の抗争」、(4)「王城としての首里城」；滑石製品、陶磁器、武具等	8	3.7 (5)	1		
		10	(1)「さまざまなグスク」；座喜味城跡等模型	17	2.5 (8)	2		
		11	(1)映像「島々のグスク」（タッチパネル）	9	4.0 (4)	2		
		12	(2)「グスク遺物に見る交流」；浦添ようどれ石棺	6	(0)	2		
		13	(3)映像「浦添の王たち」「三山の朝貢と琉球統一」「三山の成立」（タッチパネル）	9	3.8 (4)	1		
		14	(4)映像「首里城とその周辺」（タッチパネル）	5	2.3 (4)	1		
3、王国の繁栄	1. 統一王朝の時代	15	(1)「繁栄への布石 第一尚氏」、(2)「王統の交代 第二尚氏」、(3)「冊封と進貢」	27	1.7 (12)	1		
		16	(2)映像「歴代国王の御後絵」（タッチパネル）	5	2.0 (2)	1		
		17	(3)映像「冊封使行列」（タッチパネル）	4	1.5 (2)	1		
		18	(3)「冊封と進貢」；進貢船模型、旧首里城正殿鐘	8	(0)	3		
		19	(3)映像「進貢貿易」（タッチパネル）	1	5.0 (1)	3		
		20	(3)「冊封と進貢」；琉球人墓碑、奉使琉球図	1	(0)	3		
		21	(3)映像「奉使琉球図」（タッチパネル）	0	(0)	3		
		22	(4)「アジアとの貿易」、(5)「王府による島々の統治」、(6)「神女制度のしくみ」；ノロ関係資料、古文書、古地図	8	2.0 (2)	1		
		23	(5)映像「護佐丸・阿麻和利の乱」「宮古・八重山諸島のすがた」（タッチパネル）	3	4.0 (2)	1		
		24	(6)「神女制度のしくみ」；「伊平屋の阿母加那志正装」；人形	9	1.1 (3)	1		
		25	(6)「才モロの世界」；『おもろさうし』（複製）	5	(0)	2		
		26	(6)映像『おもろさうし』の世界（タッチパネル）	2	5.0 (2)	2		
	2. 古琉球の文化	27	(1)「古琉球の歴史的文物」；石碑、勾欄羽目、梵鐘	16	2.3 (8)	2		
		28	(1)映像「那覇・首里的変遷」（タッチパネル）	3	4.0 (3)	2		
		29	(1)「古琉球の歴史的文物」；「王都の整備と円覚寺」；園比屋御嶽宝珠、写真	6	3.0 (3)	2		

部門	大テーマ	中テーマ	通し番号	展示項目	観覧者数(人)	滞留時間(分)	n	動線の位置関係
4、薩摩の琉球支配と王国	1. 薩摩の支配と琉球使節		30	(1)「薩摩による侵攻と琉球支配」；古文書、絵画	24	2.8 (1)	1	
			31	(1)映像「薩摩による琉球侵攻」(タッチパネル)	12	4.6 (5)	1	
			32	(2)「江戸への琉球使節」；行列図、江戸上り年表	10	2.7 (5)	2	
			33	(2)映像「江戸上り」(タッチパネル)	3	5.0 (2)	2	
	2. 近世琉球の文化		34	(1)「唐・大和の御取合」；程順則の肖像画、琉球楽器	14	2.0 (6)	1	
			35	(1)映像「江戸から見た琉球」(タッチパネル)	6	4.3 (5)	1	
			36	(1)映像「組踊と狂言」、「三線の響き」(タッチパネル)	4	4.1 (4)	1	
			37	(2)「近世琉球の歴史的文物」；染織品、漆器	3	6.0 (1)	3	
	3. 王府と民衆		38	(1)「王府の政策」；「役人の正装」、「士族のたしなみ」；役人の人形3体、簪	11	1.1 (4)	2	
			39	(1)「王府の政策」；家譜、中山王府の印、『中山世譜』	3	3.5 (2)	1	
			40	(1)映像「絵地図が語る近世」(タッチパネル)	3	2.0 (1)	1	
			41	(1)映像「改革の時代 羽地朝秀と蔡温」(タッチパネル)	3	2.0 (1)	1	
			42	(2)「民衆のくらし」；貢納布制作風景の模型、ワラザン、古文書	10	1.4 (5)	2	
			43	(2)映像「奄美のくらし」、「八重山のくらし」(タッチパネル)	2	3.5 (2)	2	
			44	(3)「交易と産業」；砂糖小屋と製糖風景の模型、マーラン船模型	17	2.5 (5)	2	
			45	(3)映像「昆布」、「黒糖とウコン」(タッチパネル)	4	5.0 (3)	2	
			46	(1)「王国の疲弊」、(2)「列強の接近と東アジア」；『球陽』、ベッテルハイム使用の印	15	2.5 (4)	1	
			47	(1)映像「災害と困窮する人々」(タッチパネル)	6	2.0 (1)	1	
5、王国の衰亡	1. 王国の末期		48	(2)「ペリー提督の琉球踏査」、「護国寺の鐘（大安禪寺鐘）」	9	2.1 (4)	2	
			49	(2)映像「ペリーが見た琉球」「異国人のあしあと」(タッチパネル)	4	2.0 (3)	2	
			50	(1)「明治政府による琉球処分」；琉球処分の決裁文書、『琉球事件』	13	2.3 (6)	1	
			51	(1)映像「琉球処分」(タッチパネル)	8	4.0 (4)	1	
	6、沖縄県の形成		52	(1)「琉球から沖縄へ」、(3)「沖縄学の成立」；文書、方言札	9	5.0 (4)	1	
			53	(1)「琉球から沖縄へ」；軽便鉄道模型、映像「整備される交通網」(モニター；押しボタンで開始)	21	3.2 (12)	2	
			54	(1)映像「交通網の広がりと交通機関の発達」「近代の沖縄を歩く」(タッチパネル)	0	(0)	2	
			55	(2)『ソテツ地獄』と移民；泡盛壺、銀製三線	6	1.3 (3)	2	
			56	(2)映像「海を渡るウチナーンチュ」(タッチパネル)	1	4.0 (1)	2	
			57	(1)「忍び寄る戦争」；日の丸寄せ書き、戦時国債	5	3.5 (2)	1	
総合	6、沖縄県の形成		58	(1)映像「沖縄戦」(タッチパネル)	4	3.0 (1)	1	
			59	(2)「沖縄戦 失われた文化財」；大龍柱、「致和」扁額、弾痕のある厨子甕	5	6.0 (2)	2	
			60	(1)「ゼロからの出発」；うるま新報、廃品を利用した生活用具、映像「収容所生活の写真映像」(モニター；センサーで開始)、音響「屋嘉節」(センサーで開始)	11	1.7 (7)	2	
			61	(2)「基地と復興」；沖縄民政府看板、沖縄群島政府の印	1	(0)	2	
			62	(2)映像「アメリカ統治と住民の反応」(タッチパネル)	2	3.5 (1)	1	
			63	(2)「基地と復興」；「アメリカ統治下のオキナワ」；Aサイン証、琉球切手、レコード、引出し式展示	24	2.7 (10)	3	
	7、戦後の沖縄		64	(2)「アメリカ統治下のオキナワ」；映像「沖縄の戦後教育」、「文化財の復興」、「博物館の歩み」(タッチパネル)	3	3.5 (3)	3	
			65	(3)「復帰への道のり」；年表、ポスター、チラシ	0	(0)	2	
			66	(4)「新生沖縄県」；復帰記念メダル、沖縄県庁扁額、若夏国体冊子、砲弾	5	1.7 (3)	1	
			67	(4)映像「米軍基地と事件事故」、「新たな沖縄県の誕生」(タッチパネル)	1	3.5 (1)	1	
			68	(4)「新生沖縄県」；「さまざまな沖縄」；世界のウチナーンチュ大会関連資料	4	1.0 (1)	2	
			69	(1)「沖縄の現代生活」；写真	10	3.0 (3)	1	
8、沖縄の今	エピローグ 沖縄の実像		70	(1)映像「写真検索」(タッチパネル)	4	2.0 (3)	1	
			71	(2)「島々の自然と環境」；映像「変わりゆく島々の自然」(自動再生モニター)	0	(0)	1	

部門	大テーマ	中テーマ	通し番号	展示項目	観覧者数(人)	滞留時間(分)	n	動線との位置関係(回数)	
自然史	生物が語る沖縄2億年	1. 島々の成り立ちと生物相の形成	72	(1)「地層と化石」；地質年表、地質図、化石	11	1.0 (2)			
			73	(1)「地層と化石」；地史図、岩石	8	(0)			
			74	(1)映像「花粉化石」(タッチパネル)	2	(0)			
			75	(1)「地層と化石」；「琉球列島にみられる石灰岩地形」「琉球石灰岩の中の化石」；海岸地形の模型、リュウキュウジカ化石	6	1.0 (1)			
			76	(1)映像「琉球石灰岩になった海の生き物たち」(自動再生モニター)	2	6.0 (1)			
			77	(2)「亜熱帯林の生物群集」；ヤンバルの森(昼)ジオラマ	17	2.3 (4)			
			78	(2)映像「沖縄島北部の動植物」(タッチパネル)	5	1.4 (4)			
			79	(2)映像「鳥類の生態」(自動再生モニター)	4	0.5 (1)			
			80	(2)「亜熱帯林の生物群集」；ヤンバルの森(夜)ジオラマ	24	2.9 (8)			
			81	(2)映像「ヤンバルオオフトミミズ」(タッチパネル)	10	2.3 (5)			
			82	(2)映像「イモリ・カエルの繁殖生態」(タッチパネル)	7	2.5 (3)			
			83	(2)「亜熱帯林の生物群集」；「島嶼性」；イリオモテヤマネコ、アマミノクロウサギ等剥製、複製	24	2.2 (10)			
			84	(2)「亜熱帯林の生物群集」；「多様性」；ほ乳類、鳥類、は虫類、両生類、魚類、甲殻類、昆虫の標本、複製	22	2.4 (8)			
			85	(2)「亜熱帯林の生物群集」；宮古島の森ジオラマ	6	1.0 (1)			
			86	(2)映像「宮古島の動植物」(タッチパネル)	1	(0)			
			87	(2)「亜熱帯林の生物群集」；西表島の森ジオラマ	15	2.0 (6)			
			88	(2)映像「西表島の動植物」(タッチパネル)	2	2.5 (1)			
			89	(2)「亜熱帯林の生物群集」；オオシロアリタケ模型	1	5.0 (1)			
			90	(2)「亜熱帯林の生物群集」；アイフィンガーガエル生態模型	2	5.0 (1)			
			91	(2)「亜熱帯林の生物群集」；マングローブのジオラマ	12	2.1 (5)			
			92	(2)映像「マングローブに生きる」(タッチパネル)	0	(0)			
			93	(2)映像「マングローブの動植物」(タッチパネル)	0	(0)			
			94	(3)「地理的分布と種分化」；ハマボッス模型、昆虫標本	3	1.5 (2)			
			95	(3)映像「固有および分布北限・南限の動植物」(タッチパネル)	2	(0)			
			96	(3)「地理的分布と種分化」；「ハブ類の分布と種分化」、「クロイワツカゲモドキの分布」；ハブ、トカゲモドキ複製	11	1.0 (4)			
			97	(3)「地理的分布と種分化」；キノボリトカゲ生態ジオラマ	12	3.3 (3)			
			98	(3)映像「オキナワキノボリトカゲの社会行動」(タッチパネル)	3	(0)			
			99	(3)「地理的分布と種分化」；アカヒゲ生態ジオラマ	0	(0)			
			100	(4)「ヒトの登場」；「人類の進化」；港川人復元模型等	21	1.8 (6)			
			101	(4)「ヒトの登場」；「港川人の体つき」；等身大骨格パネル	6	(1)			
			102	(4)「ヒトの登場」；「港川人の発見」、「沖縄の人類化石」；港川人骨複製、人類化石	17	1.8 (4)			
	2. 生物の移動		103	(1)「海流、動物、風などを利用した生物移動」；「動物による植物の移動」	1	(0)			
			104	(1)「海流、動物、風などを利用した生物移動」；「海流による動物の移動」、「風による植物の移動」；両生・は虫類レプリカ、植物の種子	0	(0)			
			105	(2)「地球的規模の動物の移動」；「アカウミガメの移動」；剥製	13	1.2 (5)			
			106	(2)「地球的規模の動物の移動」；鳥類、アサギマダラ標本	0	(0)			
			107	(3)「島内における動物の移動」；「陸を移動する動物」、「河川を移動する動物」；ヤシガニ、モクズガニ剥製	0	(0)			
			108	(3)映像「オカガニの一斉放卵」(自動再生モニター)	6	3.0 (1)			
	3. 自然環境とその保全		109	(1)「開発による自然環境の変貌」；説明パネルのみ	2	0.8 (2)			
			110	(1)映像「生き物たちのSOS」(自動再生モニター)	1	3.0 (1)			
			111	(2)「海をこえて持ち込まれた動植物」；外來生物の剥製、複製	21	3.0 (7)			
	4. 自然観察コーナー		112	(1)「自然観察コーナー」；実態顕微鏡、岩石・植物・昆虫標本	25	2.8 (10)			
考古	1. 時代をはかるものさし	113	地域対照年表、土器、銃身	2	(0)				

部門	大テーマ	中テーマ	通し番号	展示項目	観覧者数(人)	滞留時間(分)	n	動線との位置関係 ◎●○△
考古学の世界	沖縄考古学の現況	1. 時代をはかるものさし	114	「伊礼原E遺跡の土層」；はぎ取り土層	3	(0)		
			115	(1)「旧石器時代の特徴」、(2)「縄文時代早・前期の特徴」；石器、土器	5	1.1 (3)		
			116	(3)「縄文時代中・後期の特徴」；土器、ザル、蝶型骨器	3	0.6 (2)		
			117	(4)「縄文時代晚期の特徴」、(5)「弥生から平安時代相当期の特徴」	7	0.6 (2)		
			118	(6)「宮古・八重山の特徴」；土器、貝斧、石蒸し料理の復元模型	6	1.3 (4)		
		2. ものと心の痕跡を読む	119	(1)「イネと鉄がもたらしたもの」；炭化米、鉄製品	3	2.0 (2)		
			120	(2)「出土した陶磁器」；陶磁器、高麗瓦	2	4.5 (2)		
			121	(3)「とむらいの姿」；貝輪、厨子甕、ミヤーカ写真	9	2.7 (3)		
			122	(4)「沖縄考古学の現況」；「碇石」(説明パネルなし)	0	(0)		
			123	(4)「沖縄考古学の現況」；線刻石板、南風原町旧日本軍壕出土品	14	1.3 (4)		
美術工芸の美	琉球の美	1. かたちと色	124	(5)「沖縄の窓跡」、「身の回りの生活用具」；瓦、やきもの、煙管、簪	3	1.0 (1)		
			125	円覚寺関係木彫類(獅子像、羅漢像)、掛け軸等	15	2.1 (10)		
			126	染織資料	14	3.1 (5)		
			127	漆器、やきもの類	7	2.4 (4)		
			128	三線(志多伯開鑑)	5	(0)		
			129	文書類；『中山世鑑』、田名家文書	5	5.0 (1)		
			130	「高徳」扁額	2	(0)		
歴史	モノから読む沖縄の歴史	1. 那霸港 往来する人とモノ	131	拓本/辞令書	0	(0)		
			132	(1)「王国の港：那霸港」；首里那霸港図	3	(0)		
			133	(1)映像「首里那霸港屏風」、「那霸港 海のとびら」(タッチパネル)	1	(0)		
			134	(2)「往来する人とモノ」；貿易品の複製(壁ケース)	2	1.0 (1)		
			135	(2)「港町の人々」；那霸港/(後期は休息スペース)(覗きケース)	1	(0)		
			136	(3)看護学校関係資料/「港町の人々」	2	1.0 (2)		
民俗	沖縄の伝統とくらし	1. 沖縄の民俗世界	137	(1)「村落をとりまく世界」；集落構造図、写真	8	1.4 (5)		
			138	(2)「御嶽と神人」；ノロ人形、写真、音響(センサーで開始)	20	2.4 (7)		
			139	(2)映像「各地の御嶽」(タッチパネル)	3	1.0 (1)		
			140	(3)「訪ねくる神々」；ミルク神人形	13	1.9 (7)		
			141	(3)「訪ねくる神々」；龜、厨子甕、墓模型	14	1.8 (6)		
		2. 「沖縄に生きる人々」	142	(1)「人の一生」；生年祝い、結納用品	13	2.0 (4)		
			143	(1)映像「家族の肖像」等(自動再生)	1	4.0 (1)		
			144	(2)「ウミのワザ」；サバニ、漁具、写真、図版	10	1.8 (6)		
			145	(2)映像「ウミのワザ(久高島漁労習俗)」(タッチパネル)	1	5.0 (1)		
			146	(2)「ウミのワザ」；「糸満女性とイユアチネ(魚商)」；写真、魚模型、音響(センサーで開始)	16	1.6 (5)		
			147	(3)「アギのワザ」；農具	9	1.0 (3)		
			148	(3)「アギのワザ」；農作業風景模型「ヘラと掘り串」	3	0.1 (1)		
			149	(3)「アギのワザ」；農作業風景模型「牛を使う農耕」	3	0.1 (1)		
			150	(3)「アギのワザ」；農作業風景模型「二つの運搬法」	6	1.0 (3)		
			151	(3)「アギのワザ」；農作業風景模型「摺り臼を使う」	3	0.1 (1)		
			152	(3)「アギのワザ」；「山仕事」；のこぎり	4	1.0 (1)		
			153	(3)映像「諸職のワザ」(タッチパネル)	0	(0)		
			154	(3)ミニ企画展「三線のすがた」；三線、盛鳴開鑑	16	2.0 (9)		
			155	(4)暮らしに生きる自然素材；クバ笠、ホラ貝のやかん等	4	1.0 (1)		
		3. 「家の暮らし」	156	(1)「沖縄の住まいと衣・食」；実寸大民家(一番座・二番座)	24	1.2 (6)		
			157	(1)映像「シマのくらし 着る、食べる、住む」(タッチパネル)	1	(0)		
			158	(1)「沖縄の住まいと衣・食」；実寸大民家(土間・板間)	23	1.2 (11)		
			159	(2)「年中行事と魔除け」；シャコガイ、スイジガイ	4	1.3 (3)		
		4. 「変容する民俗」	160	(1)「沖縄の住まいと衣・食」；「火とくらし」、「水とくらし」	3	1.0 (1)		
			161	(1)「祭り・行事の現在」；火の神用品、生年祝い用品	8	1.2 (6)		
			162	(1)映像「シマの祭りと行事」(タッチパネル)	2	(0)		
			163	(2)「変わりゆく風景」；「さまざま祈り」、「さまざまなくらし」	4	1.0 (2)		

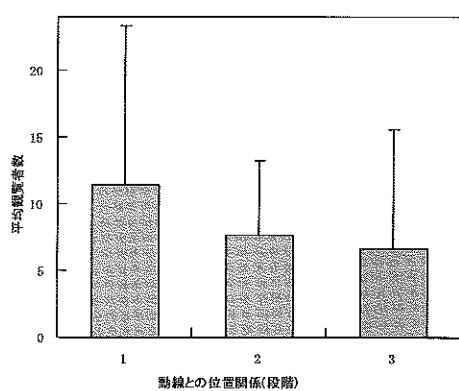


図5. 展示項目の動線との位置関係と観覧者数

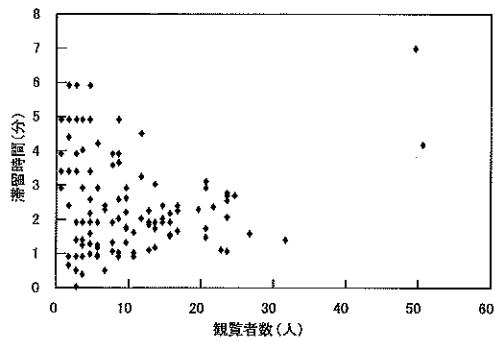


図6. 展示項目の観覧者数と滞留時間

表2. 中テーマと部門展示室間の観覧順序行列: 「0-1」等の数字は、「大テーマ-中テーマ」の番号をあらわしており、その内容については表1を参照のこと

		終 点																									
		0-0	0-1	1-1	1-2	1-3	2-1	3-1	3-2	4-1	4-2	4-3	5-1	6-1	6-2	6-3	7-1	8-1	自然	考古	美工	歴史	民俗	出口			
入口	28	13	39	9	2	4	1	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	19	0	0	0	3	9			
	0-0	1	16	0	3	0	0	0	0	1	0								8								
0-1	2		1	15	4	3	0	2	1	0	5	5	0	0	0	3	0	21	0	0	0	3	7				
1-1	27			17	1	1										1		7	1			2	4				
1-2	5	3			15	2	1							1					18					1			
1-3	1			4		15											1		1					1			
2-1	1	2	1			1		15	8	2	1	3	2					5	1	1							
3-1			1			2			13	19	3	6					1		1	3	4	1	3	1			
3-2	1	1		1		9				8	2	1				1			2	1	1	1	1				
4-1						4					13	11	5			4	2	2			3	2	3				
4-2								3			11	5	2							2	2	2	1				
4-3	1	1				1	2	1	2	2		15	4	4		4		3		3		6	1				
5-1	1					1				2		13	6	1	3					4	6	1					
6-1								1	1		1		11	3	1				2	5	4	1					
6-2	2									1		1	3		6	8				2	11	3					
6-3						1								2	9	2	1			5	3						
7-1	2	1	1										3	2		4	1				29	15					
8-1		1											3		2		3	2			3	9					
自然	1	10	2			10	11	3			2				1	1			37	9	1	9	14				
考古		4				1	6		6		3				1		7		18		2	2		2	2		
美工	4			1			6		6	2	3	3	3		2	2	9		2	2	2	5					
歴史											1		1		3		1		3		10	4					
民俗	4	3					1	1	1		1		1	4	7	16	12	6	1	3	4		39				
計	39	76	66	46	27	40	57	29	51	25	50	38	30	37	23	58	18	105	52	49	22	104	121				

(3) 観覧順序

総合展示の特定の中テーマまたは部門展示を起点とし、別の中テーマまたは部門展示（「終点」と呼ぶ）に移動した回数を表2に示す。表中太線で囲んだ部分が総合展示である。ただし、一番最初の起点と最後の終点はそれぞれ入り口と出口ということになる。

観覧順序は、極めて多様であった。大まかには、反時計回りの基本動線の方向で移動する人が多いが、途中で部門展示に入ったり内側の展示の方に行き、動線上の元の位置に戻ってこないため、時間軸に沿ったメインの展示項目の幾つかを飛ばしたりする傾向が見られた。

入場者が展示意図どおりに観覧した場合、総合展示においてはその人数は表中斜線欄の右隣に現れることになる。表2の太線枠内を見ると、それぞれの起点について、一番多くの人が到達した終点はほとんどの場合斜線右隣にあるものの、起点「1-2」、「3-1」及び「6-2」からは次の中テーマよりも、それぞれ「自然史室」、「4-1」及び「民俗室」を観覧した人のほうが多い。また、いざれにせよ全体にばらつきがかなり見られる。

考 察

常設展示室の平均滞在時間を年代で比較すると、10代が最も短くなっていた。10代や子どもなど若年層の観覧時間が短い傾向は、他館における同様の調査でも報告されている（宮田ら、2003；榎、2001；恒吉、1984）。これは、展示内容が彼らにとっては難しく、知識のある大人たちよりも楽しめるポイントが少なくなっているためであると思われる。本館でも、子どもたちは地形模型のタッチパネルや自然史室のジオラマを中心に観覧する傾向がある。彼らの観覧意欲を喚起するためには、直感的に理解でき、文章による説明を介さないでも学習可能な展示項目をもう少し多く設置する必要があるだろう。60代以上で滞在時間が下がる傾向があるのは、体力的な部分で制限されている可能性が考えられる。

観覧者数が20人以上であった17の展示項目を見ると、大型スクリーンによる映像、大型のジオラマ・模型、剥製等が多数並んでいるもの、あるいは観覧者自身が操作をするタイプの展示がほとんどを占めている。その点では、藍野（2006）や山脇（1996）が指摘するように、入場者は展示項目の意味や前後の流れよりは、視覚的に引き起こされた関心に従って観覧対象を選択する傾向があるといえる。その一方で、「繁栄への布石 第一尚氏」・「王統の交代 第二尚氏」・「冊封と進貢」（表1、通し番号15）と「薩摩による侵攻と琉球支配」・「北京への琉球使節」（表1、通し番号30）の2項目については、図と文書中心の展示であるが、それぞれ27人、24人の観覧者があった。これらは、沖縄の歴史の中でも特筆される事項であり、一般社会における関心の高さを反映しているのである。特に後者は、本調査を実施した2009年が薩摩の琉球侵攻から400年の節目の年であったため特に注目をされた可能性がある。

今回の調査で観覧者数が0人であった13項目の展示のうち5つがタッチパネルであった。常設展示室では、観覧者がよくタッチパネルを利用している印象があるが、すべてのタッチパネルを満遍なく触っているわけではなさそうだ。その他は、小型資料や文書中心のものなど、入場者に対する視覚的なアピール力が小さいと思われるものがほとんどである。考古室の「碇石」（表1、通し番号122）は小型資料ではないが、考古室の他の展示物と離れて美術工芸室

への出入り口に配置されており、名称・出土地・年代以外の情報がないため注目を集めにくいのではないかと考えられる。

観覧の順序については、中テーマレベルで見た場合でも、最後まで動線のとおり回っていく人はほとんど見あたらなかった。総合展示の「1-2」のあと、内容的にその続きである「1-3」に行かず、自然史室に入る人が多い。これは、「1-2」と「1-3」の間に自然史室との連絡口があるという構造上の問題である。連絡口の向こうにはヤンバルの森林のジオラマが見え、自動再生モニターの鳥の鳴き声も聞こえてくるので興味を引かれるのであろう。「3-1」から「3-2」をとばして「4-1」に行く人が多いのは、「3-2」が中テーマの展示の中で唯一基本動線の内側のみに配置されているためであると考えられる。壁ケース伝いに展示を見ていくと「3-1」の次に「4-1」が現れることになる。扱っている時代等展示内容の流れの上でもギャップがないため、「3-2」を飛ばしても観覧者は違和感を持たないであろう。「3-2」や歴史室のように、配置的に入場者が気付きにくいコーナーについては、案内表示等の工夫をする必要がある。「6-1」の壁ケースを観覧した後、表2では順番どおりに「6-2」に行っているように見える。しかし、ここではメインの展示項目である「6-2」の壁ケースよりはむしろ動線を挟んで反対側の大型模型で、映像・音声を伴った「6-2」の軽便鉄道模型を見ているのである。中テーマで区分しているので判りにくいが、表1の「琉球から沖縄へ」・「『沖縄学』の成立」（通し番号52）と「軽便鉄道模型」（通し番号53）を比較すると後者のほうが2倍以上観覧者数が大きい。そしてさらにその後は「6-3」よりも民俗室に入る場合のほうが多くなっている。軽便鉄道模型と「6-2」の壁ケースの間には民俗室への連絡口があり、ノロの声なども聞こえてくるためそちらに関心が向くものと思われる。

表2にしたがって、最も確率の高い入場者の観覧順序をシミュレーションしてみると、以下のような。

- (1) エントランスからエピローグを通過して、まず「1-1」へ行き化石や映像を見る。
- (2) 地形模型、自然史室、考古室、美術工芸室と

回る。美術工芸室から一番多い行き先は考古室だが、同じところへ戻ることはないとして「3-1」、か「4-1」に行くことになる（ここでようやく総合展示の動線に戻ってくる）。

- (3) 「3-1」に行った人も次は「4-1」なのでここで合流し、「4-1」から「6-2」までは動線どおりに進んでいく。
- (4) 再び動線を外れ、民俗室にはいり、ここから退出する。

中テーマ間を移動するときは、毎回単純に確率的な行動をするのではなく特定のパターンを持つ人もいると考えられるため、このような観覧順序がどの程度現実的かわからぬが、日ごろ展示室で入場者を見ていて感じる印象とは余り違っていない。

当館常設展示の平均滞在時間は52.7分、頻度のピークは40分前後であった。展示を見る速度には個人差があるとはいえ、総合展示だけでも71の展示項目があり50分程度の滞在時間では動線に沿ってすべての展示項目を見るのは難しいと思われる。総合展示に関しては動線に従って観覧したほうが学習効果は高いものと考えられるが、入場者にしてみれば、動線を把握したところで時間的に回りきれないという問題がある。そこで、当館の総合展示については、動線を明示することとともに展示項目の選び方を伝える必要があるだろう。今回、観覧された場合の1展示項目の滞留時間は約2.5分であった。仮に1展示項目2.5分で50分間観覧するとすれば、1回の滞在で観覧できる展示は最大20項目ということになる。どの展示をどのような順序で20項目観覧するのがよいか、入場者に対しモデルプランを示すことは意味があると思われる。

常設展示の展示項目は、部門展示も含めると163を数える。仮にそれぞれ1分で見たとしても2時間半を超てしまう。展示の観覧時間は2時間程度が限界ともいわれ（宮田ら、2003）、当館の常設展示のすべてを1回の滞在で観覧するということは大多数の入場者にとっては難しいと思われる。展示する側としては、入場者にはリピーターとして何回も足を運んでもらうことを想定しなければならないが、そのためには、来るたびに新しい発見があるという展示をするべきであろう。視覚的に興味を引く展示

がよく観覧されてはいるが、かといってすべての展示項目を同じような手法の展示物にすることは必ずしもよいこととは思われない。今回、多くの人に見られているが滞留時間が短時間のものであるとか、逆に観覧者は少数ではあるがじっくり見られている展示項目があることを窺わせる結果となつた。初回の滞在では目立つ展示項目を見て、2回目は地味だが内容の深い展示項目に気がつく、というような観覧の仕方ができるように、学問的内容や外観・構造などの点で様々なレベルを組み合わせ、重層的な展示をつくることが望ましいと考えられる。

謝 辞

本調査に関して、データ採取及び当館常設展示の改善案についてレポートを提出してくれた下記の学芸員実習生の皆さんに感謝します。

前期；大江李奈、金城聖良、栗田隆気、根上晴香、小畠圭、瑞慶覧長潤、伊波愛実、小谷実李、比嘉俊允、屋富祖由菜、山口こずえ、山城李紗、照屋智美、伊波綾乃

後期；木野沙央里、川上詩織、佐久川尚樹、照屋雄大、玉元大輔、稻嶺航、金城良尚、具志堅清大、照屋苑子、当銘由美、長嶺裕紀

引用文献

- 藍野かおり. 2006. 新潟市歴史博物館の常設展示と来館者の展示観覧. 新潟市歴史博物館研究紀要 第2号：19-32.
- 宮田公佳・竹内有理・安達文夫. 2003. 展示改善にむけた観客調査の設計と実施：見学順路と滞在時間から見た観覧行動の解析. 国立歴史民俗博物館研究報告 第108号：321-352.
- 榚剛史. 2001. 商品陳列館における来館者調査レポート. 明治大学博物館研究報告 第6号：25-39.
- 恒吉正巳. 1984. 博物館における見学者の動線調査. 鹿児島県立博物館研究報告 第3号：49-56.
- 山脇一幸. 1996. 企画展示における動線についての一考察. 広島市交通科学館研究紀要 第1号：27-29.